未来の交差路

真導霧照

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来の交差路

【Ｎコード】

Ｎ６４７９ＢＯ

【作者名】

真導霧照

【あらすじ】

ある日、家で未来の交差路というゲームを主人公が見つける。面白半分でこのゲームを始める。すると、開始早々、突然ゲームの中に吸い込まれたと思ったら、いつもと変わらない主人公の部屋だった。だが、天気と時間だけがさっきまでとは違かった。未来に飛ばされた主人公に待つ未来は？また、そこで出会う少女との進展は？

序章１（前書き）

文章を作るのがかなり下手なので、読みづらいかもしれませんが、よろしくお願いします。

序章1

２０１７年、世界の人口は８５億人に達していた。食料は底に着きかけ、難民は増える一方だった。世界中の人々の生活は、食料を盗むというものばかりだ。このような問題を解決するために、国は特別機関を設立した。『人口調整機関』そう呼ばれる組織は世界各国に作られ、２０３０年まで未だあり続けている。どのような計画をしているのかは、全くもって理解できない状況だ。謎の多いその機関を、人々は『死の番人』といつからか呼ぶようになった。

俺は今、家の物置に埋まっているゲームを見つめている。そもそも何故物置にいるのかというと、母親に雛壇を片付けてくるように言われたからだ。片付けたのはいいのだが、そこで偶然見つけてしまったゲームに、俺は釘付けになっていた。

「このゲーム一体何なんだろう？　一回部屋に持っていくかな」

ゲームを手に取り俺は持ち上げた。大きさの割に以外にも軽かったので、多少驚いた。

「こんなに軽いなんて……。ますます興味が湧いてきた！」

俺は急いでゲームを持っていく。日頃、何かと暇をしていた俺は、このゲームを見てやってみたいという好奇心に駆られていた。

「よし、さっそくやってみようかな」

俺は自分の部屋について直ぐにゲームを開く。

「ん？　これってボードゲームか？　薄くて軽いと思ったらボードゲームだったのかよ。あれ？　取扱説明書はどこだ？　……あ、あった。え～と、このゲームには自分が何時も持っているものを使います。スタート地点に置いて下さい。その後、双六を使います。双六で出た目の数を進んで下さい。ゴールまで５０００マスです。なお、最初は場面に何も書いていませんが、止まると見えるようにな

ります。……これが取扱説明書？　何だかよく分からない説明だったけど、やってみれば分かるだろ」
俺は何時も身に着けている腕時計をスタート地点に置き、サイコロを振る。
「５、か。順調だな」
俺はスタートから５マス腕時計を進める。双六なのに、腕時計を使って遊ぶことなんていう機会は、そうそう無いだろう。５マス目に腕時計を置くと、突然マスから光が溢れ出てくる。俺はそのまま光へと飲み込まれていった。

序章1（後書き）

次は一周間以内には投稿できると思います。

至らぬ点をどしどし注意してください

序章２（前書き）

１の続きで～す。今回も少ないですが、楽しめていただければ幸いです＾－＾

序章2

光に包まれてしばらくすると、突然光は消えた。
「早速理解できないようなことが起こっているんですけど……」
いきなり起こったことに、俺はかなり動揺していた。周りの物も、特に動いているわけではなく、ただ、光が急に現れ急に消えただけだったが、それだけで、異常な現象だと断言出来た。
「そ、そういえば、マスに書いているのは何だったんだ？」
俺は腕時計の止まっているマス目を見る。
「はあ？　チュートリアルをクリアするってどういうことだよ」
チュートリアルと言っても説明書は全て読んだ。たかが双六にチュートリアルとは、テレビゲームではあるまいし……。俺は今の状況が全く理解できなかった。
「……そういえば、さっきまでは太陽が燦燦と降り注いでいた気がするんだけど」
頭を整理しようと思って覗いた空は、先ほどとは裏腹に雨が降っている。先ほどまで雲一つ無い青空だったというのに……。何だか寒気がする。
「そういえば母さん、洗濯物干しっぱなしで買い物行っていたな。仕方ないから閉まっておくか」
俺は急いで庭の物干しへ向かう。だが、そこにはシャツ一枚すら干されてはいなかった。というよりも、物干し竿すらなく、倉庫の横に分解されて立て掛けられている。
「もしかして、母さんが入れたのか？」
そう考えたが、それは直ぐに否定出来た。なぜなら玄関を出るときに、自分の靴以外何も無かったからだ。だが、今回はそれ以上に不自然なことが起こっている。何故、今日に限って倉庫の横に物干し竿が立て掛けられているのだろうか？　嵐の日でも平気で出して置く両親が、片付けるはずがない。これはどう考えても異常だ。

「それに、今日は妙に静かじゃないか？」

確かに雨ということもあるが、何時もは雨でも近所の犬や子供の泣き声が多少聞こえるのだが、今日は全く聞こえない。まるで、自分だけがこの世界に残っているかのようだ。

「ちょうど外に出たし、ちょっと周りを散歩でもするか。……まさか、誰もいないとかホラーなことはないよな」

俺は心の底で多少の恐怖とそれと同じくらいの好奇心を持ちながら、人を探すべく町の方へ向かった。

序章２（後書き）

次も１週間以内に書き上げる予定です。

1章1（前書き）

さすがに1日では書けませんでした＾＾

今回は少し長いので、いろいろ間違っているところがあるかもしれませんが、ご指導のほどよろしくお願いします。

1章1

「本当に誰もいないなんて……」
あれから町の中心まで歩いてきたが、人間どころか虫一匹すら見ない。
「こんなことってあるのかよ。まるで俺1人の世界みたいなんだけど」
俺が1人で嘆いていると、目の前に人影が見えた。
「あ、ちょっと待ってくれ！」
俺はその人影を呼び止めようと、聞こえるように大声で叫ぶ。だが、その人影はそのまま走って逃げていく。
「おいおい、やっと人に会えると思ったら、今度は無視されて、仕舞いには逃げるとか、いくらなんでも酷いだろ。……まぁ、徒競走なら自信はあるけど」
俺は何時も暇をしているわけではない。普段は高校で短距離走の選手として活躍しているのだ。最近は試合がなくなり、部活も部員の減少で同好会になってしまったので、時間を持て余していただけなのだ。だからこそ、その辺の学生などに走りでは負けない。俺はそう思いながら全力で人影を追いかける。だが、何故か一向に追いつけない。
「た、頼むから待ってくれ。俺の話を聞いてくれ」
俺は仕方なく追いつくことを半分ほど諦め、大声で聞こえるように叫ぶ。すると、今まで走っていた人影が立ち止まった。それを見て、俺は走るのを止め、人影の近くまで歩いていく。
「よ、良かった。ようやく人に会えたよ」
俺は心の底から安堵した。だが、息が上がっていたためか、綺麗には声を出せなかった。
「……もしかして、あなたは初心者？」
後姿で顔は見えないが、身体の線や声からして、どうやら女の子の

ようだ。
「君、徒競走速いね。女子に追いつけなかったのは初めてだよ」
「あぁ。それはここでは当たり前だと思うよ」
彼女は言葉通り当たり前な表情をしている。それも全く息切れもせずに、だ。
「あのさ、会って早々悪いと思うんだけど、この世界って何なの？　さっきまでの世界とは違う気がするんだけど」
今の俺にとって最も重要な質問に対して、彼女は『あぁ、そんなこと』と、そっけなく返してくる。
「それで一体ここって何なんだよ」
もう一度同じ質問をすると、彼女は語り始めた。
「ここは未来の交差路の中にある世界。正確には私達の未来の世界。あなたはこのふざけたゲームに参加してしまったわけ」
彼女は淡々と説明をしてくれるが、それはあまりにも冗談めいたものだった。開いた口が塞がらない俺に、彼女は鋭く要件を言い当てる。
「それで、今回はチュートリアルをクリアしろ、っていうお題だったんでしょ」
「え、何で分かったんだ？」
俺は目の前にいる彼女を魔女か何かかと思った。だが、その考えは一瞬で打ち消される。
「だって最初のお題は全て同じだもん。1~6の全てがチュートリアルをクリアすることだよ。その後からはチュートリアルとは違うものが出てくるけど」
多少は考えていたが、やはり誰も彼も同じお題らしい。普通に考えれば直ぐに分かることなのに、この状況のせいで頭が回らない。
「そうか。まぁ、当然だよな。あ、もしかしてこの双六に使うサイコロって何でも良かったのか？」
「はぁ、たとえばどんなもの？」
「それは勿論、正八面体とか正二十面体とか使えば、正六面体より

出る数が大きいときがあるだろ。これなら早く終わらせられるじゃん」
俺が考えたことに、彼女は長い溜息を吐く。
「あのね、あなたは双六の由来を知っているの？」
「俺は由来とか全く気にしたことないけど」
楽しければ由来などどうでもいい。俺は今も昔もそう思っていたので、由来など知る機会がなかった。
「元々双六は二つのサイコロを使って、どれだけ6を出せるかで戦いを左右するゲームだったから、双六という名前になったという説があるの。それが、時代が経つにつれて、二つサイコロを使うものと一つだけのものの二種類になった。だから、正六面体以外で双六をするということは、そもそも双六という物から外れてしまうの。おそらくはこの世界でもあちらの世界でもない異世界に飛ばされたかもしれない」
彼女の説明を聞いて、素直に普通のサイコロを使って良かったと思った。
「そんな歴史があったのか……。そういえば、さっき言っていた初心者ってどういう意味なんだ？」
「それはそのままの意味。この世界に初めてきた人のこと。この世界では二度目からは初心者ではないからね」
彼女の言葉はすごく真剣なものだった。チュートリアルをクリアする程度で、初心者ではなくなるのだろうか？　どんなゲームでも二回目は明らかに初心者だ。まぁ、もうこんなゲームはしたくはないが。
「もうこの世界には来たくないよ。君は好き好んでここに来ているの？」
俺の言葉に、少しの間彼女は口を閉ざしたが、話し始めた。
「とりあえず、その話はチュートリアルをクリアしてからにしよう。後であっちの世界で話をする」
「え、あっちの世界って……君もこの辺に住んでいるの？」

「そうだよ。……それで、チュートリアルのクリア方法は、この世界のことルールを知ること、だったから、とりあえずヘルプって頭で思い浮かべてみて」
俺は彼女に言われる通りにする。すると、どういうわけだか、頭の中に直接何かが響いてきた。どんな技術でこんなことが出来るのか、是非とも誰かに説明してもらいたいものだ。
〈それでは、この世界について説明を開始します。まずは……〉
始めの方は、彼女から聞いたこの世界のことだった。そして、彼女の言葉をさらに正確に言うと、このゲームは未来を決めるゲームらしい。だが、次からの言葉に、すでに俺の考えから外れたことが語られた。

１章１（後書き）

ここまでです。次は割と早くだせるといいかな？
今度も１週間以内にはだします＾＾

1章2（前書き）

1日でおわりました＾—＾

さっそく投稿します

1章2

〈次に、次回からの注意事項です。まず初めに、この世界には3日に一回はこの世界に来なければなりません。もし、これを破れば、あなたという存在を即抹消します。次に、次回からのお題ですが、これから全て、あなたが人を殺さなあければならない数が明記されます。なお、クリアするまで元の世界へは戻れません。ちなみにお題を回避することは出来ますが、代わりに20マス分下がらなければなりません。そして、ゴールに近づくほど難易度が上がっていきます。なお、無事に人を殺した場合は、殺した人のマスの進みの半分が贈呈されます。奇数の場合は切り捨てです……〉
今の説明は何なのだろうか。3日以内に来なければ死ぬ。お題はこれから殺す人の数が明記され、達成するまで帰れない。徐々に難易度は上がっていき、殺した人のマスの半分を得られる。こんなことがあっていいのだろうか？　こんなものは、ゲームと表記された、ただの殺し合いではないか。
〈最後に、この世界から元の世界へ戻っても、こちらの世界に来たことのある方としか会話は出来ません。話しかけても何も反応はしません。こちらに干渉していない人の記憶から、あなたに関しての記憶は凍結されますので、元の世界では影響ございません。元の世界で元の生活をしたい方は、是非、このゲームのゴールまで進んで下さい。そこで、あなたの未来をお返しいたします。その代わりに、今までの未来の生死を決める力はなくなります。以上、チュートリアルでした。お戻りの際は『戻れ』、此方へ来る場合は『導け』と頭に思い浮かべてください。今日はお疲れ様でした〉
頭に直接響いていた声が消える。
「こんなことってあるのかよ。あんまりだろ」
俺はその場で跪く。チュートリアルで聞いた内容に、俺は絶望を感じていた。

「とりあえずあっちの世界で話そう。ここだと襲われる可能性もあるから。町の中央公園の噴水前で待っているから」
そう言って彼女は目の前から居なくなった。だが、こんなことを簡単に認められるはずがない。でも、だからこそ、きっと彼女はあっちで話すと言ってくれているのだろう。彼女は安全かどうかも考えているほど優しい人だ。俺は彼女が他人思いの強い人だと思った。
それと同時に、今の俺の無力さと心の弱さが、どれほど弱いものかを感じた。
「……そうだな。まだ3日は有余があるんだ。まずは状況を確認した方がいい。もしかしたら欠点とかあるかもしれないじゃないか」
俺は彼女にいろいろ聞くために、瞼を閉じて頭で戻れと思い浮かべた。

1章2（後書き）

あんまり見直ししていないので、間違えがあるかもしれません；ー；

次はまた少しかかるかもしれませんが、早く終わらせるつもりです

＾ー＾

1章3（前書き）

続きで～す＾－＾

1章3

次に瞼を開いたとき、俺は自分の部屋に座っていた。

「空が晴れている。それに洗濯物も干したままだ。……確かに元の世界に戻った」

やはりあれは夢だったのではないか？　俺はそう思った。

「とりあえず、中央公園の噴水前に行ってみるか。あの人がいるかもしれないし」

俺は彼女に会うために、急いで支度をして中央公園へ向かう。

「あ、あれは！」

公園へ向かっている途中、見知っている女子を見かけた。

「お～い、巴菜（はな）。風垠（かざきし）巴菜。聞こえているか～」

俺は何気なく、何時ものように巴菜に話しかける。だが、俺のことを無視して通り過ぎようとするので、俺はもう1度、今度は巴菜の耳元で話す。だが、巴菜は全く聞こえていない、もしくは反応しないで友達と歩いて行ってしまった。そこで俺は、自分の置かれている状況を認識出来た。

「……どうやらあれは事実の出来事だったのか。あれは夢だったら、って期待した俺が馬鹿だったってことか」

俺は精神に傷を負いながら、中央公園に着いた。噴水前では、先ほどまで話していた彼女が当たり前のように待っているが、当然、誰も見もしていなかった。

「ごめん、待たせちゃったか」

「別に私も5分前ぐらいに来たから。……それで、何か聞きたいことがあるんでしょ」

先に待っていてくれた彼女は、俺の心が読んだかのように話題を振ってきた。何とも気が利く女の子だ。

「あぁ。あのさ、本当にあの世界は殺し合いの世界なのか？」

「そうだよ。あの世界は人と人が未来を賭けて殺しあうための舞台。

ただそれだけのために作られた場所」
俺の言葉に躊躇わず、彼女は率直に言ってきた。
「それじゃあ……」
「私も人を殺した。もう６人だけど、あの時の血の臭いや悲鳴は慣れないよ」
そう言って彼女は顔を下に向ける。きっとその時のことを思いだしてしまったのだろう。普通の人が、血の臭いや悲鳴に慣れることはないだろう。そこまでになると、それは人格が崩壊しているに違いない。
「最初、未来を奪われたことに実感が湧かなかったけど、さっき幼馴染に会って初めて分かったよ。君も未来を返して貰いたいんだよな。でも、君だけじゃない、このゲームを知らずに巻き込まれた人全てが思っているんだ。だからこそ、殺し合いが起こる。実際体感しないと分からないものなんだろうな」
俺はそう言って彼女の隣に並ぶ。しばらくすると、彼女が口を開いた。
「今日はあなたが会ってくれて良かった。初心者のチュートリアルに付き合えば、殺しは免除されるから」
「そんなこともあるのか」
どうやら、チュートリアルでは教えてくれないものも多いようだ。
俺はただ彼女の言葉を受け入れただけなのだが、彼女はまた溜息を吐く。
「本当に、私と最初に会って良かったね。もし、他の人と会っていたら死んでいたかもしれないよ。初心者でも参加者（プレイヤー）だから、殺しにカウントされるんだから」
二度目は初心者ではないということは、そういうことだったのか。
大抵の場合は、この世界のことを良く知らずに、何時の間にか殺されるのだ。このゲームについて知った今だからこそ、彼女の言っていることがどれほど恐ろしいかが分かる。きっと知らずにこの世界に入ってきて殺された人も少なくないだろう。そう考えるとやはり

俺は運が良かった。彼女に最初に会ったからこそ、俺は今も生きていられる。
「俺も君に感謝すべきだな。ありがとう」
「別にお礼なんていらないよ。それで、あなたはこれからどうするの？」
「……そうだな、未来を返して貰うために戦う、かな。正直、さっきのことで負った傷がまだ癒えていないんだ」
俺が言ったことに彼女は暗い顔をして返してくる。
「この世界なんてこんなものだよ。私もあなたと同じ体験をしたからよく分かるよ。人の記憶から消されることが、どれほど辛いことなのかが。だからこそ選択肢は自然に決まるんだよね」
人の記憶から無くなるということは、自分の存在を否定されることとさほど変わらないことだ。こんなことは普通の生活では絶対に味わえない、最悪なものだろう。
「無条件で参加させられて、仕舞いには選択権すらない。でも、人間が作ったものならどこかに欠点があるかもしれない。……だから、俺はそれを探すつもりだ」
俺はこの世界に戻りたい、と素直に思っている。だが、それと同時に人を殺したくない気持ちがある。だからこそ、俺にはこの世界から出る方法が限られていた。

1章3（後書き）

次は明日にはだせないかも・・・

1章4（前書き）

続きで～す

春は眠いですね^－^

「そんなことしたって無駄だよ」
彼女はこちらを向いて笑いながら言ってくる。
「何で決めつけられるんだよ？　可能性は確かにあるだろ」
俺の言葉を聞いて、彼女は一瞬にして真剣な顔になる。
「そんなものがあれば、とっくに探し終わっているの。ここに来た大半が同じことを思って沢山のことをしてきているの。それに、このゲームの開発者は各部門の天才なの。しかも、今生きているのはたったの５人。その人達ならどうにか出来ると思うけど、どこを探しても見つからない。一応この町に全員住んでいるらしいんだけど」
「そんな……」
俺の考えていたことの全てが、彼女の言葉に一瞬で捻じ伏せられた。
「分かったでしょ。私達が天才を超えていない時点で、開発者を見つけるしかないの。そのためには時間がいる。だから、ここで教えてあげる。もう諦めて、人を殺しなさい。そうしないとあなたは殺される。そして、あなたが思っていることは叶わない。多くの人を助けたいなら、矛盾しているだろうけど、人を殺していくしかない。自分が現実に戻れれば、このゲームについて報道できるんだから」
彼女は最後に畳み掛けるように、俺に人を殺せと言ってきた。俺はそんな残酷なことが出来る人間ではない。そんな俺に向かって、彼女はただ真剣に言ってくる。しばらく考え込んでいると、彼女は急に話しかけてきた。
「隣人を自分のように愛しなさい」
彼女が言ってきた言葉は、何時も巴菜が語ってくるのでよく知っていた。
「隣人愛（アガペー）か。もしかしてクリスチャンか？」
「違うけど、隣人愛の言葉は好きなの。でもね、この隣人愛って自分がいないと他人は愛せないの。だから、その中心の自分がいなく

なって、そこから抜け出すためには人を殺さないといけなかったら、私は他人を最小限に殺す。矛盾するかもしれないけど、この世界から出られるなら、私は手段を選ばずに出たい。それが、結果的には多くの人を助けられるのなら」

彼女の言葉はとても重いものだった。他人を愛するためには自分が必要、要するに自分第一というわけだ。だが、この状況でも他人のことを少しでも思っている者は少ないだろう。彼女はその数少ない1人なのだ。

「あのさ、このゲームって協力とか出来ないのか？　俺は君に協力する」

俺の言葉に、彼女は驚いてこちらを向いてくる。

「そんなに信用していいの？　もしかしたら殺すかもしれないのに」

彼女の言葉は、何だか否定してほしいような言葉だった。

「そのときはそのときさ。今は君が一番信用できる。それ以上はなにもないよ。それに、仲間がいた方がこのゲームって有利なんだろ？　お互いに良い協力関係になれないか？」

俺の言葉を待っていたかのように、彼女は即答する。

「分かった、協力しましょう。でも、あなた、本当に人を殺せるの？　もし出来ないのならこの協力はなかったことにするよ？」

「それは、今度の回に見ていてくれれば分かるよ。それまでの時間は開発者を探そうぜ。何時かは見つかるだろうし」

俺と彼女はこの瞬間から仲間になった。互いの存在を認め合う仲間に。

「そういえば名前知らなかったな。俺は肌勢健汰（はだせけんた）、これからよろしく」

「健汰、ね。私は柊木優香（ひいらぎゆうか）。よろしくね」

「よろしくな、優香」

優香、そう名乗った彼女と俺は、開発者を探すために町を探し回った。

1章4（後書き）

明日もがんばるぞ～

1章5（前書き）

遅れました

1章5

あれから3日過ぎた。結局、開発者を見つけられず、このゲームを続行しなければならなくなった。
「はぁ。とうとうこの日が来てしまったんだけど、俺は本当に殺せるのか？」
時間が残っていたときは、出来ると思っていたが、いざ直前になると、流石に動揺してしまう。
「ここまで来て弱音なんか吐いていられないな」
俺はサイコロを振る。
「次は3か。進みが良いような、悪いような、どちらにも取れる数字だな」
俺は瞼を閉じて頭で導けと念じた。瞼を開くと、やはりさっきとは違う、青空が広がっていた。ふと思うが、一体どのような原理でゲームに入っているのだろうか？　是非、開発者に会ったら聞いてみたいものだ。
「で、お題は何だ？　……2人殺めろ、か」
本当に殺す人数が出てきた。もう驚きはしないが……。
「よし、待ち合わせの場所に向かうか。向かっている途中で人に会わなければいいんだけどな」
俺は優香と待ち合わせしている公園に向かう。公園の噴水まで無事に着いたが、優香は険しい表情をしていた。
「どうしたんだよ？　顔が怖いぞ。俺、変なことしたか？」
優香は俺の態度に呆れていた。
「やっぱり素人だよね、健汰」
「はぁ。全く意味が分からないんだけど」
すると優香は座っているベンチの隣を叩く。俺は黙って隣に座ると、優香は耳元で囁いてきた。
「だから、付けられていたんだって。多分、健汰に仲間がいると思

って隠れて付いて来ていたみたい」
「マジかよ」
俺は周りを見回そうとすると、優香が俺の目の前に立ってきた。
「無暗に周りを見ないで。相手に気付いていることがばれたら駄目」
前屈みになって俺に囁いてくる。この体勢からだと、見ようと思わなくても、自然と胸を見てしまう。歳相応の胸が、前屈みになることで強調されているので、俺は急いで他の場所に目を移した。
「ばれたって戦えばいいんじゃないのか？」
俺が言えばいうほど、優香は『こいつ馬鹿だ』と言いたそうな顔をしてくる。
「だから、このまま武器もない私達が、武器を持っている敵と戦うなんてことをしたら、確実にこっちが死ぬでしょ。健汰、この状況を甘く考えすぎ。ここは戦場なの、死ぬか生きるかが一瞬で決まる場所だってことを理解しなさい」
「ご、ごめん。俺が悪かった」
そうだ、ここは戦場なのだ。煩悩は捨て去らなければ……いや、自分がすることに注意深く行動しないといけない。いや、勿論煩悩も捨てなければならないのだが、まずは自分の行動に注意することが大事だ。それを経験してきた優香だからこそ、そういうことが分かっているのだ。俺はまだ何も知らないし、何も出来ない人間だ。そんなやつが近くにいれば優香自身も危ないと分かっているからこそ、彼女は助けてくれる。
「これから敵の殺気とか見られている感覚を覚えてもらわないと、直ぐにこのゲームから退場するよ。今はしなくていいけど、これからはしっかり周りを観察して」
「あぁ、次はへましないようにするよ」
俺は優香の言葉を心に深く刻みつけた。

1章5（後書き）

次も1日ではだせないかな……

1章6（前書き）

新学期は忙しくてかなり遅れました。
申し訳ございません

1章6

「それならいい。……それで、何人だった？」
俺の言葉に、優香は口を開いたまま止まってしまう。
「……あのさ、こんなことぐらいは直ぐに理解してよ。殺す人数を聞いているの」
優香は疲れたと表現しているのか、項垂れて話してきた。
「あぁ、2人だった。そっちは？」
「6人。もう最悪だよ。一気にこの人数なんて初めて」
優香の口から聞いた数字に、俺は驚きを隠せなかった。たった一回のお題で6人も人を殺すなんて、どれだけ惨いものなのだろうか？
まさに、優香の言った戦場が相応しい。
「とりあえず、気づいていない振りをして、武器になりそうなものと戦う場所を探しましょう。戦いはそれから。今回は2人で8人も殺さなくちゃいけないんだから、準備は抜かりなくしないとね」
そう言って優香は腕を組んでくる。腕に優香の胸が当たり、俺は先程終わらせた、煩悩退治が、もう一度始まってしまった。それも、先程より大きい煩悩だ。
「な、何だよ、いきなり」
俺は思考が上手く回らなくなり、その結果、滑らかな言葉が出なかった。
「静かに。このまま付き合っているフリをして。このまま歩き続けて、まずは戦うための本拠地を探そう。武器はその後」
俺は優香の適切な判断に黙って従う。――それから俺達はしばらく歩き続けていると、優香は急に立ち止った。
「ここが一番良い場所だね。いろいろ物も揃っていると思うよ」
「まぁ、ほとんど医療器具だけど」
優香が決めた場所は町一の巨大病院だった。
「でもさ、他にもここに立て籠もっているかもしれないぞ？　無暗

に入ったら殺されるんじゃないか？」
「その通りだけど、ここに立て籠もっている人は、私の知り合いだから」
「なら大丈夫だな」
優香は俺と腕を組んだまま、病院へ引き連れる。中は現実と変わりなく、清潔で、静かだった。
「多分、何時もの場所にいるでしょうから、そこへ向かいましょう」
俺は優香に連れられるまま、立ち入り禁止と書かれた場所に着いた。
「ここなのか？」
「そうだよ」
優香はそう言って目の前の扉を開ける。そこには、山ほどの医療器具と人を殺すための武器が散りばめられていた。そして、武器の下には沢山の衣服が散らばっていた。
「何とも一言では突っ込めない部屋だな」
「それは言わない方が良いよ。何回言っても直す気ない人だから」
優香は深い溜息を吐きながら、慣れた手つきで散らばった物をかわしていく。
「ちょっと待てよ、俺も行くって」
俺は優香が進んだとおりに物をかわしていく。だが、優香のように上手くいくわけもなく、こけそうになりながらも奥まで無事に辿り着くと、先に奥に行っていた優香が、カーテンの向こうで誰かと話しているのが聞こえた。

1章7（前書き）

終わったので投稿します＾＾

「だから、別にあの人はそういうのじゃないの！　ただの協力者なだけ」
「別に恥ずかしいなら言わなくていいよ」
優香は誰かと揉めているようだが、どうやら優香の腰が折れたらしい。
「もう反対するのが面倒になりました……」
話が静まってきたところで、俺はカーテンの奥を覗くと、そこでは優香と２０歳ほどの女性が話していた。
「あ、あの～。どういう関係なんですか？」
俺は考えるよりも先に言葉が出てしまった。そのせいで、俺の顔を見た２人の顔には、『こいつ、もう少し手順を踏んでからその質問をしろよ』のようなことが書いてあるように見えるのだが、これは気のせいではないだろう。
「え、え～と。とりあえず、ここにいる馬鹿らしい彼女は、一応、私の母親」
「どうも、肌勢健太です。……って、はあ！」
成り行きで普通に挨拶してしまったが、気づいたら流石に思考が一瞬止まってしまった。まさか、優香の母親がここまで若いとは思わなかった。いやいや、それよりも、何故、ここに優香の母親がいるのだろうか？　これは全く理解できない状況だ。
「優。この子全然この状況が理解できていないよ。まだ初心者なのかい？　優が教えていないのが悪いのね」
「違うでしょ！　何で私と母さんがこの世界にいるのかが疑問になっているんだって。それに、私はちゃんとこの世界について話したよ。母さんとは違って手順をしっかり踏んでね」
「母さんの方が手順は踏みますぅ。優とは違って大人なの」
またも一つのことで口論になる。まぁ、『喧嘩するほど仲が良い』

とは言うが、一つのことでここまで言い合えるということは、普通とは比べられないほどの仲の良さなのだろう。
「あ、あの、お2人は仲が良いんですね」
2人の言い合いが一段落着いたところで、俺は素直な感想を述べる。
「え～と、肌勢君だっけ？　私と優が仲良く見える？」
「健汰、もしかして、『喧嘩するほど仲が良い』という言葉で考えた答えがそれだって言わないよね？」
「は、はい。優香が言った通りに考えました」
俺は優香の冷たい、見るだけで動物を殺せるぐらいの視線に、思わず謝ってしまった。全く反省しなければならない場所が分からないけど。
「はぁ、それは肌勢君の主観の考えだから、否定しようとは思わないけど、そもそも、一般的とか普通という言葉は、その人の考えや経験から求めたものだから、その考えは、当の本人達から言えば、自分達のことをろくに知らない人達の考えなんだよ。肌勢君は一般や普通という言葉を疑問に思ったことがないの？」
優香の母親の言葉は、当たり前のように人生を過ごしてきた俺にとって、とても考えさせられるものだった。確かに、昔は思っていた時もあったとは思うが、中学に入り、高校に入っている間に、考えもしなかった。

1章7（後書き）

読んでくださり、ありがとうございました

１章８（前書き）

終わったので投稿します＾＾

1章8

「何だか俺って、何も考えずに生きてきたんですね。お母さんに言われて、初めて自分の無能さが分かった気がします」
俺は返事を返しながらも、未だに考え続けていると、優香の母親が急に笑いながら話してきた。
「ちょっと早いわよ、お母さんなんて」
「えっ！　あ、すいません」
「だから、健汰と私は何にもないって言っているでしょ。……健汰も、誤解されるような言葉を使わないで！」
優香の母親の言葉に、俺は動揺している最中、優香は怒鳴って注意をしてくる。
「じゃあ、何て呼べばいいんですか？」
俺は怒鳴っている優香に敬語で聞いてしまう。
「そうね、変人とか、野蛮人とか、とりあえず世間一般的な人間じゃないから、世間で馬鹿にするときに使う言葉でいいんじゃない？」
「それはさすがに酷いだろ……」
優香の毒舌に、やはり優香の母親は食いついてくる。
「私は変人かもしれないけど、野蛮人ではないですよ～。そもそも、私の子供なんだから優も同じような人間でしょ」
「違いますから。私は絶対に母さんのようにはなりません。私が勉強中に『ハワイに行ってくる』とか急に言い始めて、さっさと行っちゃうこととか、私が風邪を引いている時は『今、アメリカのテレビ番組で、いい商品があったから買いに行ってくる』とか、そもそもアメリカのテレビ番組って何？　ここは日本なんですけど。それに、アメリカに行くまでの費用の方がよっぽど高いのに、何で気づかずにアメリカに行っちゃうのかな」
「あ、あれは、偶々、アメリカのテレビ番組がテレビに受信されて、それが便利そうな掃除機だったから、買いに行っちゃっただけだよ」

「偶々とかないから。しかも、あの時勝ったものは掃除機じゃなくて、よく分からない変なお菓子だったよね。それに、母さん、あの時の言い訳は『テレビでアメリカに格安で行けるやつがあったから、つい行っちゃった』って言っていました。いい加減なことを言わないで」

「そんなことまで覚えていないでよ。これだから優には二度目の嘘は失敗するのよね」

「今、嘘って言ったよね。何ですか？　隠すのも面倒臭くなって、素直に白状することにしたんですか？」

それからも、親子の口は休むことなく文句や愚痴を言い合い、静まったのは、それから数十分後ほど後のことだった。

1章8（後書き）

まだまだ続きまーす

1章9（前書き）

しばらく投稿できなくてすみません；一；
学校が忙しくなってしまい、趣味に打ち込めないというのはつらいものですね。
ということで、生徒会の仕事の関係でまた何時あげられるかわかりませんが、今後ともよろしくお願いします＾一＾

1章9

「あの、それで俺はどうすればいいんですか？」
「え、何のこと？」
優香の母親はきょとんとしている。
「何って……どう呼べばいいのかという話です」
俺が最初に話したことからずれて、どうやら優香の母親は事の始めを忘れているらしい。
「だからさ、健汰。この人のことは変態とか変人でいいの」
「…………」
俺は優香の言葉をスルーして、優香の母親の言葉を待つ。
「それじゃあ、華結良さんでいいかな。あ、お母さんでもいいわよ」
「またぶり返す気ですか？　じゃあ、よろしくお願いします、華結良さん」
「どうやら健汰も母さんの扱い方が分かってきたようね」
優香は頷きながら当然のように言い放つ。これがまた、口喧嘩に発達するものだとは考えずに。いや、ここまでくると、故意でやっているようにしか思えない。
「それで、付けているやつどうするんだ？　遊んでいる場合じゃないよな」
「あぁ。そうだったね。とりあえずここにある武器から好きなのを選んで、入り口で待ち伏せよう。おそらく付けている人はせいぜい1階を巡回しているだろうし」
「え？　何でだ？　追い詰めた方が効率的じゃないか？」
「あぁ。それは駄目だね」
俺は優香とこの場をどう切り抜けるか話していると、華結良さんが首を突っ込んで来る。
「だってさ。これはゲームじゃないんだよ。単なる殺し合いで効率的とか勝率が良いとかは関係ない。必要なのはただ油断していると

ころを1発で仕留めることだけ。そして、敵に気付かれないように存在を消すこと。それ以外を信用した瞬間、その人は必ず死ぬ」

「……………」

俺は何も言い返せなかった。もしかしたら俺はここをまだゲームだと思っているのかもしれない。華結良さんの言葉は俺の甘さを見透かしたようなものだった。

1章9（後書き）

待たせてしまったのに内容が少なくてすみません
次はもっと書いて投稿します＾－＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6479bo/

未来の交差路

2013年6月29日12時13分発行